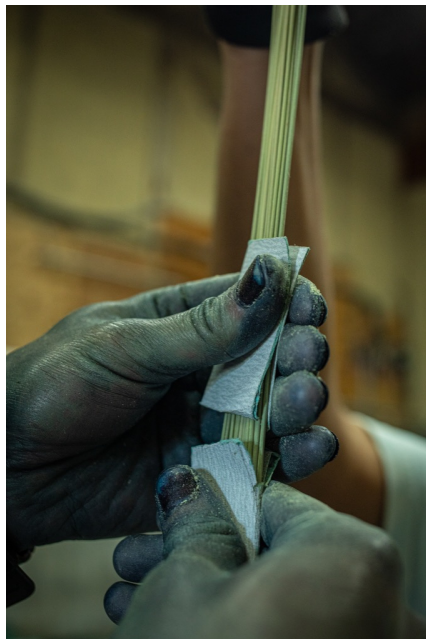


縄夏生 BUAISOU 展覧会 2025年6月1日（日）～7月13日（日）



縄紋松段之段染暖簾 ©2025 BUAISOU, Inc. All Rights Reserved.



初夏、両足院の庭園は年間を通じ最も華やかな時期を迎えます。池のほとりに群生する“半夏生（はんげしょう）”の葉の一部が白くなり、まるで天に向かって開花するかのような幻想的な風景に変化します。この美しい夏の始まりに合わせ、6月1日から世界的に活躍する藍師・染師 BUAISOUを迎え、展覧会「縄夏生」を開催いたします。

“半夏生”は雑節のひとつでもあり、これは夏至から数え11日目（今年は7月1日）のことを指しています。古より農家にとっては畑仕事の重要な節目として、一年で最も多忙な時期とされてきました。徳島県にあるBUAISOUの藍畑もまさにこの頃、藍の葉が育成期を迎え、日ごとに力強く、そして深みを増した蒼を蓄えていきます。

本展覧会では、藍染という日本古来の技術にBUAISOUが新たな感性を吹き込んだ掛け軸や襖絵、暖簾など約15点の作品を展示します。いずれも伝統技法のひとつである型染めにより“縄”の紋様が多様に表現された展示となっています。“縄”は人類最古の造形といわれ、作品には縄目紋様がまるで藍地に施された化粧のごとく、白く浮かび上がります。そもそも半夏生という植物が白く変化する様子は古くは「半化粧」と呼ばれ、やがて「半夏生」へと変化したと伝えられています。展示の舞台となる書院の前庭には、ちょうど白く色づいた半夏生が見ごろを迎え、作品と庭園の景色が呼応し合う情緒的な時空間が広がるでしょう。

京都府の名勝庭園に指定されている池泉回遊式庭園にある茶室「臨池亭」では、展覧会のテーマに即した茶会や呈茶も企画しています。茶室には藍で染め上げた特製の畳を設え、日々の暮らしに寄り添う用の美と現代的なクリエーション——相反する要素が交差する空間を演出します。藍と茶が織りなす空気を感じながら、みなさまご自身の物語とも向き合う静かなひとときをお過ごしいただけたら幸いです。



縄夏生：BUAISOU展覧会

会期：2025年6月1日（日）～ 7月13日（日）会期中無休
時間：12:00～16:00（閉門16:30）
会場：両足院／京都府京都市東山区大和大路通四条下る4丁目小松町 591
拝観料：¥1,000、中高生 ¥500（本堂、書院拝観）、団体 ¥900（20名以上）

○庭園散策をご希望の方は予約制特別拝観へお申し込みください。

予約制特別拝観（半夏生の庭園散策付）

受付時間：9:30 / 10:00 / 11:00（ウェブサイトより事前にご予約をお願いいたします）
定員：各回20名（先着順） 拝観料：¥2,000

○静寂な朝の時間帯に作品鑑賞や庭園散策をお楽しみいただけます。
ご予約後はキャンセルができませんのでご了承ください。
予約リンク：https://www.asoview.com/channel/activities/ja/ryosokuin/offices/1768/courses?language_type=ja

茶会・呈茶

庭園内にある大村梅軒好みの茶室「臨池亭」におきまして少人数での茶会、および呈茶を開催いたします。
通常は一般非公開の茶室にて BUAISOU による特別な設えの中、作品をご鑑賞いただきながらの一服（抹茶とお菓子）を楽しんでいただけます。



○呈茶
開催日時: 基本的に毎日 10:00～15:00
（お寺の行事、茶会開催日などは変更になる場合もございます）
料金: ¥1,500(税込・事前予約不要/当日受付決済)

○茶会
開催日時: 6/1(日), 8(日), 21(土), 29(日), 7/5(土), 12(土)
時間: 13:00-14:00 / 14:00-15:00の1日2席、7/5(土)は14:00-15:00の1席のみ
人数: 各席 5名まで
料金: ¥13,200(税込・拝観料込み・BUAISOUの手ぬぐい付)
予約リンク：<https://booking.exp.is/for/xexe/buaisou-teaceremony>

展示関連販売・半夏生授与品

BUAISOU による藍染の手ぬぐい（¥6,600・税込）
半夏生守（¥2,000）
水彩御朱印（¥1,000）
はんげしょうの宝珠（御菓子丸製作 ¥3,300・税込）

お問い合わせ
BUAISOU info@buaisou-i.com
両足院広報 pr@ryosokuin.com

BUAISOU

2015年、BUAISOU代表であり染師・藍師の楮覚郎（かじ かくお）が阿波藍の産地として知られる徳島県上板町の地域おこし協力隊を経て、メンバーと共に起業。原料となる藍の栽培をはじめ、薬（すくも）造り、染色、デザイン、製作まで昔から分業制であった藍染業を一貫して行い、藍染のオリジナル商品の製作、コラボレーション、国内外での展示やワークショップなどにも取り組み、これまで様々な手法で天然藍の魅力を伝えてきました。薬と木灰汁（あく）、ふすま、貝灰のみで発酵させた藍液で染めた藍は、深く美しい発色と高い堅牢度が特徴で、2018年には当初からの夢であった、糸をひと縋ひと縋、手で染めた藍染めのジーンズも完成。今後は、綿栽培や製織、古いミシンをメンテナンスしながら、ジーンズの製造も目指しています。2022年には香港のアートセンターCHAT（Centre for Heritage, Arts and Textile）にて個展を開催しました。2025年にはユニクロとのコラボレーションにより「DISNEY IN BLUE」コレクションが発売になりました。

<https://www.buaisou-i.com>

INSTAGRAM @buaisou_i

両足院

両足院は1358年、龍山徳見（りゅうざんとっけん・1284～1358年）禅師の入寂に際し、彼の弟子たちが開創しました。龍山禅師は若い時分から漢詩文の才覚に長け、中国・寧波へ単身留学、通算40年にわたり各地を遍歴ののち、中国で途絶えそうになっていた臨済宗黄龍派を再興しました。室町幕府を創設した足利尊氏・直義兄弟の招きにより日本へ帰国、京都で建仁寺、南禅寺、天竜寺の住持になり、その後、室町時代を通じて隆盛を極める「五山文学」最高峰の寺院としての礎を築きました。

江戸時代に入ると10世の雲外東竺（うんがいとうちく）など当院の住持が、五山の中で学徳抜群の高僧に与えられ最高の名誉とされる「碩学禄」を授与され、学术界の中核を担いました。現在重要文化財に指定されている画僧、伝如拙による《三教図》をはじめとする漢画（唐絵）のコレクションにかけては当時から有数のものがあり、室町から江戸時代にかけて長谷川等伯、伊藤若冲など美術界の重鎮や上田秋成など文壇の才人たちがよく出入りしていました。陶芸で知られる五条坂もほど近く、保存されている日記にはそうした書画や禅にまつわる典籍と陶磁器の貸し借りをしていたという記述もあり、古くから美術、工芸、文学など多分野にわたる文化交流のサロンの役割も担っていたようです。

年に数回ある特別拝観の機会には両足院にゆかりのある絵師、等伯や若冲らの美術品を公開展示するほか、近年では当院から着想を得て制作を行った国内外の現代美術家による展覧会も多く開催しています。主な企画はミハエル・ボレマンス（2014年）や杉本博司（2021年）、エリザベス・ペイトン（2024年）が手がけた掛け軸や襖絵などの展示や、庭園も含めたランドスケープ全体でインスタレーションを行ったボスコ・ソディと加藤泉による二人展（2024年）ほか。建築や工芸、デザイン、ファッションも含めジャンルは多岐にわたり、常に時代と呼応する新しい禅のあり方を模索するプログラムが開催されています。

<https://ryosokuin.com>

INSTAGRAM @ryosokuin